



I はじめに

○ 討議の柱

「5本のレポートに共通する狙いとか目指すもの、そして課題、展望を踏まえながら。討議課題1より部落差別をはじめとする様々な人権課題、2日間のレポートの中で部落差別だけではなく様々な人権課題が提起されています。これらを自分の課題として捉え、差別をなくすための教育内容の創造にどう取り組んでいるのかを5つの報告の実践事例から学び、教育活動をさらに深められるような議論になればと思っております。続いて、討議課題3より、教育者が何を学び、どのように変容していったのか、子どもたちの変容にどのように繋がったのか、具体的な大人や子どもたちの姿や言葉から、今後の実践に繋がるヒントを見つけていけたらと考えています。続いて、討議課題5より、ここでは、小、中、高校、そして関係諸機関との連携を通して、子どもたちの育ちと学びを、どのように支え、引き継いでいるのかを、それぞれの教育活動の今後の展望や、これからの子どもの成長を期待して議論していきましょう。この第7分散会で出される実践報告と討議が、この会場にいるすべての方々にとって、これまでの実践を振り返り、明日からの活力と具体的な方策へとつなげられるように、活発で前向きな発言をよろしくお願いいたします。以上、第7分散会の基調提案とさせていただきます。

○ 日程の説明

II 報告及び質疑討論の概要

—報告1—③

「豚や牛のいのちから部落問題を考えよう」

(奈良県人教)

小学校6年生を対象に、「生き物のいのちをいただく」という教材を入り口として、部落問題学習へつなげていった実践、屠場(食肉センター)で働く人たちが登場する本を読むうちに、初めは食肉産業に携わる方たちを卑下するような態度があった子どもたちに前向きな変容が見られた。そこには、子どもの表面的な言動に揺るがない授業者の指導の方針と、教材が訴えかけるイメージを信じる気持ちがあった。牛を解体する職業の尊さと、そこに寄せられる偏見を目の当たりにすることで、部落問題

について考える第一歩となる取り組みである。

—主な質疑と意見—

兵庫 P125「牛の命からと場へつなぐところ」で、「と場で働く人は被差別部落出身が多い(すべての人が被差別部落出身ではない。)」の部分。どういうふうに伝えたか。子どものマイナス発言になぜ口出ししなかったのか。部落問題を自分事とすることで、どんなよいことがあるのか。

三重 と場の人のイメージの部分。正直、聞いていてドキドキした。学校でもしかして、親戚など場につながる児童がいたら、ときどきするのは。学校での授業前に家庭訪問をしたり、子どもや親の思いを聞いたりするなどの状況を把握していたのか。この取り組みの中で視点をあてた子はいたのか。

三重 と場の部分。3行目。差別について考えるとどのようなことか。取り組みの視点は何か。また子どもたちの差別の現実はどこにあるのか。食べることから始まったものが差別解消に繋がっているのか。そして今後、どのような展望をもっているのか。

報告者 と場の人に被差別部落出身者という言葉は出していない。職業としてと場で働く人たちが「牛殺しとか、牛殺しのやつは人間を殺せるんじゃないか」と差別されているということで進めた。高校の時に、部落差別に出会った。同和教育に熱心な先生がいて人権作文や「立場宣言をせい」と押し付けられた経験があり、しんどかった。そんな思いを子どもたちにしてほしくなかった。この学習で教員として子どものマイナス発言に口出ししなかったのは、私自身、子どもどうしの議論を聞いたかったことと、子どもには真剣に考えたという思いを持って欲しかった。子どもたちから差別や偏見が出たなら別の手段で取り組もうと考えた。今回、児童の祖母がと場出身まではわかっていた。視点を当てる児童は特にいなかった。人を感じる授業をしていきたかった。

報告者 私自身知らないことが多く、教員になって部落について勉強して、いろいろなことに気が付くようになった。自分のこととしてとらえ、自分なりに考えを持って行動できるようになってほしかった。この学習はこのような思いで行った。

大阪 高校の時、部落問題学習をするときに正直つらかった。子どもたちと人権学習をする時には色々な思いをしていることを踏まえて一緒に考える時間を持つようにしてきた。ただ、自由に発言させることは、誰かを傷つけてしまうのではないかと、迷いながら実践をしている。

山口 地区出身者の児童がいるのかいないのか。部落史学習の中で、この取り組みと層場の取り組みをどのように関連させるのか。

大阪 映画とか絵本とかを使って実践されて、子どもたちがすごく変容が見られたというところがすごく学びになった。私もと場を含む学校に勤務したことがあるがあり、そこには地区から通ってくる子どもたちもいて、一緒にと場見学に行ったり、子ども会だけで行ったりすることがあり、そこでと場の方々から生き生きと子どもたちに教えていただくことがたくさんあった。また、子どもたちは体の匂いを気にしていたが、これも仕事の学習の一環で「こんなふうに分たちの親が働いてくれていたんだ」という誇りを持ち、子どもたちが自信を取り戻していくという姿にも出会った。若い先生から、色々な偏見が出てきた時、取り組めないという声がある。どのように取り組まれてきたか。若者からこのようなことをいわれたら、どのように助言するのか。

神奈川 高校の時、差別発言があり、教師になって、このような取り組みをしている報告者さんにとって「部落」って何なのかということを知りたくなった。

報告者 これまで、いろいろな学校に勤務した。高校のときのことを思うと体が震える。教師になって、最初はあまり部落問題学習をしなくてよいと思っていた。親戚の結婚差別、友人の結婚差別を経験し、まだまだ残る差別を見てやっていかないかと思った。出身の子でない子も部落差別に出会う。だから、自分事として学習してほしいと思っている。社会の教科書での記載の部分も子どもたちには話をしている。若い先生と話していると性的マイノリティの学習では、さまざまな意見が出るが、部落問題の話になると意見が出なくなる。でもいろいろな体験をしている。ぜひ取り組んでほしい。

—報告2—⑳ 「地域の人権課題の授業化と実践の広がりを求め て」 (長崎県人教)

50年も昔に西日本一帯で起こった「カネミ油症事件」が、2世被害者に引き継がれ、偏見という2次被害ももたらしながら人権問題として残存している事実に向き合い、推進や不安視などの様々なせめぎ合いを経ながら、五島市のどの小中学校でも、授業として実施できる指導案作成に5年をかけて取り組んだ足跡の報告。カネミ油症の被害者にも直接聞き取りを行い、授業で扱う際の生き方のモデルとなってもらうためにやり取りを進める過程には、血の通った人権学習にしたいと思いが込められており、あらゆる人権学習を構築する上での参考となりうる。そして、被害者を苦しめるのは周りの偏見や無理解であるという重要な視点も提

起された。

—主な質疑と意見—

徳島 この症状とは、熊本の水俣病と似ているのか。1968年に発症したものが2019年に授業実践をしているが、2019年以前には、このような実践は行われていなかったのか。

報告者 代々引き継がれるところは水俣病と似ている。この症状は、病気のデパートといわれるぐらい、色々な症状が出る。この学習は、50年間、熱い思いのある教員が取り組んで来たもので、点で行われていたが、このようにまとめておこなったのは初めて。

宮崎 「立ち上げようで」の部分で、2021年、市教委がこの人権課題を重要だと考え毎年調査を行っている。五島市教委はどのような思いだったのか。そして、どのくらいの期間調査を行い、どんな展開を考えていたのか。

報告者 社会の副読本の中に身近な人権課題ということで、この問題を取り上げている。調査はかなり前からあったと聞いている。今年も調査がある。

福岡 今はネットでなんでも調べることができる。子供たちが調べ中であやまった認識をもった場合はどのような対応をするのか。学習の構成や時間配分を教えてください。

報告者 授業後、児童が実際にネットで調べてきたことがある。まったく知らない中で調べているのではないので、よかった。すべてをネットで調べることはだめだと思う。授業は1時間で行っている。ただ、私は、いろいろな方に入ってもらってやってきた。

東京 盲学校に勤めている。すべての学校に指導案を配布するということが、特別支援学校への指導案の配布はあるのか。地域の教材の掘り起こしをしているが都立、県立と市との情報共有をさせてもらいたい。

滋賀 カネミにかかわって、子どもたちがこの事件をどのように捉えているのか。また、子どもたちの意識を聞かせて欲しい。今後どのように子どもに変容してもらいたいのか。また、授業を終えてどのような変容があったのか。

兵庫 児童の様子、授業後の感想、児童の学びを教えて欲しい。地域の方々の反響はどのようなものだったか。

徳島 岩村さんの「しなやかな生き方」について教えてください。

兵庫 地域の中に差別がある。学校教育で取り組んだことが、社会教育、生涯学習としてどのように取り組まれているのか。

報告者 特別支援学校との共有はできていない。共有サーバーがあり、市立の小中学校からは入れるが、県立の学校とは繋がっていない現状なので、これを機に広めていきたい。周りの差別意識、子どもたちの差別意識、間違った認識をしていた保護者へ自分から言えなかった。事実を正しく伝えることが大切である。たった2時間しか学習しないが、する・しないでは全く違ってくると思う。「被害者が自分から言い出せないのは、周りの人たちのせいではないか」と社会教育でも、学習する必要があり、出前授業に取り組んでいる。「しなかやかに生きる」というのは差別に抗おうとすれば、途中で折れてしまうかもしれない。でも、ある意見を聞きながらも自分の考えを、竹のように絶対曲げないで生きていくこと、私もそんな生き方をしたいと思っている。

—報告3—③

「だから見る必要があるんだ」

(新潟県同教)

部落に住む小学6年生のAと、その母親との深い関わりの中から、報告者自身の部落への向き合い方の変容が報告されている。Aの家庭では、自分たちの住むところが部落であることを話しており、母子ともにそれを否定的に捉えず、遅く生きようとしている。報告者は彼らと向き合う中で、どのように部落について話そうか迷い葛藤しながらも、部落問題学習を通じて、差別の現実について深く考えているAから学び、部落に対する見方を大きく変えてきた。映画『破壊』を観た後に、主人公の丑松が出自を明かすかどうかという場面について報告者とAが語り合う中で、Aは少なくとも仲の良い友だちにしか話せないと言う。それこそが差別によって不自由な状態にさせられているという事実気づいたAに対して、どのようなことができるのか、報告者の探求は続いていく。

—主な質疑と意見—

徳島 この話はいつの話ですか。

報告者 今の話。

徳島 昔、学習会が行われていた。今の学習会はどのような場であるか。

愛媛 児童支援加配教員とは何かを教えて欲しい。また、放課後学習について、どのような子が対象か。Aの学級での部落問題学習についてどのような内容か教えて欲しい。お父さんが本当に差別を受けたことがないといったが、先生はどう思っていた

か。

報告者 部落の子の学力保障のために始まった学習だが、そのほかの児童も来てよいとしている。ただ、声かけするものでもない。被差別部落がある学校区に割り当てられている加配で、部落にかかわっていく仕事になる。歴史を追って学習をしている。授業を追うごとに、子どもたちは、差別を許せないという怒りも持っていった。授業でのやり取りを通して子どもたちは自分の思いを発言する中で、本当に差別意識はないか問う授業を展開した。お母さんとAさんに部落の話をするということについて、母親は「話をすればいいよ」というふうに言っていたが、私の方が踏み出す勇気がなかった。お父さんは差別を受けたと思っている。それを認めてしまいたくないのではないかとと思っている。

香川 隣保館に部落以外の子を呼びたいと取り組んだことがあったが、通っている部落の子の居場所を奪ったことがあった。Aの居場所はどこだったのか。部落の子の居場所に関してどう感じているのか。

報告者 新潟の部落は少数点在で、たくさん部落の子がいるわけではない。Aさんの居場所として小学校の頃はAさんの家にあつまって遊ぶことはあったが、中学校になり、なかなか集まる機会が減った。Aにとって、学習会の場は居場所になりえている。

奈良 部落は自分自身を見つめ直す場所とあるが、もう少し詳しく教えてもらいたい。先生にとって、部落が特別な場所になっていないか。場所に対する気持ちから自分自身の差別性みたいなものが生まれていないかということ、報告者の考えがあったら詳しく教えて欲しい。

報告者 人なのか、場所なのか、自分の中で整理できていなかった。以前の私は、部落に対して差別を受ける場所としか考えていなかった。マイナスのイメージをもっていたのでAさんに話をする時も、辛い話しかできない。だからAさんに辛い思いをさせることになるので話せなかったのかなと今振り返っている。関わる中で、見つめなおす場所だったが、今は、場所ではなく、人との出会いが自分を見つめ直してくれるものであると改めて思った。

大阪 Aの葛藤の中で、Aに寄り添う子や、関わってくれる子がいたのか。周りの子の変容もあったのかを教えてもらいたい。

報告者 学級の子は、Aが出身であることを知っているかはわからないが、現在、Aがみんなに自分のことを話せる深いつながりを持たせることはできて

いないが、学習教室などで一緒にいるBさんにはAさんに寄り添って欲しいと思っている。

三重 全人教の場でレポート報告することについて、AやAの母親、父親はどう思っていたのか。

報告者 具体的には反応はないが、Aの母親はいろいろな人に知ってもらうことはいいことだと言っていた。Aはすごくいいと思うと言っていた。父親は「発表することはいいですよ」ぐらいの反応だった。

奈良 報告者がAの母親とAと関わりながら、どんどんどんどんAが成長していく姿を聞いていてすごく勇気をもらった。学習をすすめる中で若い先生方が人権教育に取り組むのに抵抗があるという話があったが、僕も人権課題を扱う時にはやっぱり自分の中に若干の抵抗を感じながら取り組んでいると思うことがある。抵抗があった報告者が実際報告したことで得た気づきや学びを詳しく教えてもらいたい。

報告者 部落が差別を受けていた場所という認識だった。授業をすることで、差別がひどくなったらどうしようとか、もっと差別意識が芽生えたらどうしようという怖さがあると実践から遠ざかってしまう。AやAさん家族とかかわる中で、凄さを感じた。その凄さや逞しさを伝えたいと思った時に授業がしたくなるのだと思う。

兵庫 Aが暗い表情をした時の先生の思いは。伝統とか文化を支えていくプラスのイメージを持たせる部落史学習をどのように進めてきたのか。

報告者 事前に話ができなかつたところがあった。授業で部落差別に対する反対意見が少なくAさんに言いづらい場面をつくってしまった。それは、Aさんを少数の立場にさせてしまったためだと思う。部落の歴史を押さえていく中で、差別を乗り越え、文化の形成過程に寄与してきたというプラスのイメージを膨らまして授業をしている。

総括討論(第一日)

大阪 部落のある校区だが、地区外の保護者は増えた。部落史学習を進める中で出身の子はクラスの子を信じて出身を告げた。出身の生徒だけでなく周囲の力がないと差別はなくなる。教育者、子どもと周囲が変わることが大切。

福岡 大学に入学して教師を目指していたが、自分の血筋にあまりよくない人がいることを母に告げられ、昔のように調べられ、公務員になるのが難しいかもしれないと言われた。現に自分ががんばればなんとかなると考えていた。教員になり人権

学習を学び、当事者が頑張るだけでなく周りの社会が変わっていく必要があると感じた。

奈良 若い先生の人権教育に取り組む抵抗ってなんだろうか。そのハードルを越えていくのは先輩や同僚の先生方の存在は大事だと思った。前任校で保護者から差別発言があったが、報告者の学校でその発言に対してどのように取り組んだのかを教えてください。あと、人権教育をいかに系統立てて進めているかを聞きたい。

報告者(奈良) 保護者からの差別発言に対して「僕も出身なんです」としか言えず、保護者との会話が途切れてしまった。いま思うと、ちがう言い方があったと反省している。人権教育に色々チャレンジして失敗した経験から楽しくなっていた。若い子にも引き継いで欲しい。

報告者(奈良) 前任校ではいろいろな先輩の先生方からいろいろなことを教えてもらった。系統立てがあるのが当たり前の学校だった。現任校は地区のない学校だが、部落問題をやっていかないと一本目の報告者と話して思った。先生方が集まる機会に中学校の先生とも話をしながら系統を立てて学習ができるように進めている。

新潟 2000年から新潟の同和教育が始まったと私は認識している。私のクラスや隣のクラスに部落の子が一人いて、当初は気づかなかったが、近所の人による差別発言があったが、部落に触れてはいけなかった。部落問題学習も、大阪の教材とかを借りながら、でも全く実態からかけ離れているものだった。そんな時に部落の子どもに部落の話をして付き合い、ずっと付き合っているという先生の話聞いた。まずは、部落の子と思う生徒の保護者に話を聞いたが、「同和教育って知っていますか」と聞くのが精一杯だった。ムラの保護者と部落の話ができたが、どのように関わったらいいのかわからず、なかなか子どもと出身の話ができなかった。2007年に全人教石川大会で報告したが、「あなたの部落は何か」と言われ、聞かれていることの意味も分からない状況だった。その後、部落の祖父母や親がどのように生きてきたかを聞くことだと気づいた。報告者(新潟)と父親とのやり取りを聞いていると、差別を聞ける自分になっていないのかと思う。やはり、若い人と一緒にやりながら聞ける教員になりたいと思った。

奈良 どんなことに取り組むかも大事だが、子どもをどうみるのか、子どもの背景をどうみるか、あらためて大事だと感じた。

大阪 指導案を作り、人権学習して行く上で大事にしていきたいという視点がたくさんあり、私も実践を重ねていきたいと思った。部落の中の小学校に

転勤したのがきっかけで授業をつくっていくことになった。はじめの一步となる授業を作ることが大事だと思う。若い人を巻き込んで八尾市の自主教材をつくった。そこで、子どもの変容が見られたことで教員ものめり込んでいった。学校内で部落差別はなかったが、外国にルーツのある子への差別はあって、しっかり学習をしないといけないと感じた。地区を出たときに困らない学習はしていかなければならないと感じた。部落の子を強くすることではなく社会などの周りが変わっていかなければならないと思う。

鹿児島 子どもたちを知り、どのように繋げていくかがテーマ。レポート報告をした時「支援学級の子を自分より下に見る子がいる。そのような子どもがいた時、どうするのか」と質問されたことがありうまく答えられなかった。どんな人でも知れば知るほど何も変わらないことを実感した。今回の報告を通じて相手のことを知ることが大事であると確認できた。地域から出て新しい仲間と繋がる力をつけていくのは教育の力しかないと思う。

第一日目のまとめ

熱のこもった討議が繰り広げられたため、まとめの時間を設定できなかった。

第二日目 1日目の振り返り

昨日のレポート報告の討議を振り返ります。1本目奈良県のレポート報告では、と場で働く人の生き方や差別の現実から子どもたちが学習前に持っていたと場のイメージや、差別的な言動が学習後には、と場で働く人の思い、いのちを食べ物に変える仕事へのまなざしから自分たちが誤った認識を持っていたことに気がつき、学習の中で正しく事実を知ることの大切さを確認した取り組み報告でした。2本目長崎県のレポート報告では、カネミ油症事件被害者への偏見や差別の現実から、差別をなくすために、五島市の小中学校の先生がどこでもだれでも出来る授業指導案を作成し、授業実践につなげていく取り組みの報告がありました。被害者当事者の「事実は伝えてほしいが、被害の説明は最小限にしてほしい」という願いは未だ被害者へ根強く残る差別の現実と苦しみを知りました。会場から「市内全体での授業実践には特別支援学校は入っているのですか。」という問題提起がされました。レポーターをはじめ私を含めた会場にいる多くの参加者がはっとさせられた視点だったと思います。私たち教員がなぜその視点を忘れてしまうのか、これからも考えていかなければなりません。3本目の新潟県のレポート報告では、加配教員としてAやその家族との深いかかわりの中では報告者の葛藤や被差別部落地域に対する考え方や当事者(Aの父親)の思いをどのように考えるのかの議論がありました。議論のなかでも、報告者が自分の言動や関りからもう一度、被差別部落地域や当事者への捉

え直しをしている印象を受けました。関わり続けることの大切さや、子どもから学ぶ視点を確認できた実践報告でした。3本のレポートを通して、人の生き方や思いから私たちはいつも学ばせていただいているのだと強く感じました。生き方を学ぶことは自分自身の生き方を問い直すことでもあります。困難に立ち向かい乗り越えるという生き方だけでなく、しんどい人が下をむいている社会こそみんなを変えていくという視点をもっておくことを今日の討議でも引き続き確認したいと思います。

—報告4—③

「自他を大切にし、互いを認め合って、ともに生きていこうとする児童の育成をめざして」

(兵庫県人教)

小規模な小学校ならではの、人間関係の固定化と、他者を決めつけてしまう傾向がある子どもたちに対して、自分らしさや個性を自他ともに尊重できる教育活動を、全校体制で行っている。特に「ジェンダー」に関わる固定的な見方や考え方を乗り越えることに重きが置かれ、さらに高学年では性の多様性についても学ぶという流れになっている。このような学習が、日常の学校生活における服装の取り組みにおいても個人の自由を大切にできる雰囲気にも広がりを見せている。

—主な質疑と意見—

奈良 どの立場でこの授業実践をしたのか。子どもどうしのやり取りや発言で印象に残っていることを教えて欲しい。

報告者 2年生、6年生の取り組みをした。他の学年では教材と指導案作りを行ったり、実際授業を見て、事後の振り返りなどで関わった。6年生の授業の時に差別や偏見はなんでだめかという問いから、自分らしさが出せないとか本来の力が発揮できないことをみんなで考え、導きだしたことが印象に残っている。

神奈川 自分の子どもがトランスジェンダーで子どもの気持ちを理解できなかった。20歳の時に手紙でカミングアウトしてくれた。本人は保育園の頃から違いに気づいていた。周りからどのように思われるのか怯えながら生きてきたことに親ながら気づけなかった。先日、LGBTQの授業をした時に、教えているトランスジェンダーの子どもが自分の子どもの事と重ねて感想を書いてくれた。性的マイノリティの立場で悩んでいる児童のことを教えて欲しい。今回の授業を受けてどんな感想を持っているのか気になっている。

報告者 研修で必ずいることが前提で取り組んでいかなければならないと学んだ。現に服装のことなどで色々悩んだり、生きづらさを感じている子はいる。授業すると自分らしく生きることは大切であるという感想を書いた。

—報告5—③

「ふるさとを愛し 心豊かに たくましく生きる生徒の育成～語り合える仲間づくりを通して～」

(徳島県人教)

地域に根差した小規模な中学校における、同和問題学習の実践例を報告した。1点目は、体験型のワークショップによる親子人権学習であり、人権カルタについて発表し、行動宣言を考えるとというものだった。保護者も巻き込んだ取組により、家庭でも人権学習を話題にする重要性を提起されている。2点目は、部落問題学習との繋がりから、地域の識字学級を訪問し、そこで学ばれている方々との出会いから、学ぶことの意義について再確認するという取組みであり、この学習を通じて、否定的な発言をする生徒にも前向きな変容が見られた。

兵庫 Aの背景について教えていただきたい。報告者が考える「仲間」とは。また、仲間作りのポイントは。自分事にする必要があるわけについてどう考えられているのか。

報告者 Aの背景ですが、固定化した人間関係があるなか、小学校の時に転校してきた。クラスも11名中3名が女子で、自分から発言することは少なく自己肯定感持てない子だったが、最近マイナスな発言を聞かない状況になっている。周りがAのしたことに対して肯定的な発言をすることが増えてきた。A自身も色々な活動をする中で、自信を深め、リーダー的な役割を担うようになった。自由に話しあうための仲間づくりですが、苦しいときに助けてと言えるような仲間ができたらいいなという思いで取り組んでいる。また、自分の考えを伝え、周りにも受け止められるような関係が仲間づくりというふうになっている。他人事としてではなく、自分事としてとらえることは、自分からなにかしていった欲しい。

奈良 保護者への人権教育の推進は大事なことだと考えるが、身近な人権課題を家族の中でどう捉えていくかが大切だと思う。最近、保護者からの差別発言があり、学校からどのようにアプローチしていけばよいかが課題になっている。家族で人権について話すというのは、どのようなものを想定されているのか。人権学習を終えて、子どもたちが差別に憤りを持ったり、おかしいと言う子が出て来たり、差別をしてしまった経験が語られ、自分の中で人権意識の高まる瞬間があるが、自分に視点を向けるみたいなのがあるか。

報告者 親子で行った人権カルタで12の人権課題を取り上げた。胸を張ってふるさとを語れるという札で、自分の故郷を誇りに思えることと友だちをリンクさせた保護者がいた。笑顔というキーワードのある札ではみんなが笑顔になれる社会をつくりことが大切だという発言もあった。札について選ん

神奈川 心の中で言いにくいことを誰かに言えることが、その子の生きにくさを変え、力強く前に出ていく力を身につけていくと思う。今、私が教えている子どもは、同じ学年の教員にはカミングアウトしてくれた。しかし友だちには言えなど言っている。様々な取組みを通して差別のことをみんなに言いたいと書くようになった。本当に苦しい思いをどうやって大人である教員が受け止めていくのか知りたかった。

報告者 3年ほど前からジェンダー教育を活発に学ぶ機会があった。必ず学校にはいるということや命に関わる問題として捉えることを学んだ。児童に合った教材づくりを通じて系統的な学習がスタートした。スカートをはきたくない子は保健室や校長室に話をしに行く。安心していえる仲間がいる場所を作っていかなければならないと思っている。

香川 小学校として中学年ぐらいから性について認知し学習していくことが適切だと思っていたが、ここ数年、1年生から性について学ばせることの大切さを共有できた。効果的で系統立てて子どもたちを柱に人権教育に取り組まれていることが参考になった。校則の見直しで子どもたちの選択は変わったか。

報告者 校則の見直しによって自分で考えて着たい服装を選んでいると感じる。周りに何かを言う子もいない。人の目を気にして服装選んでいるようなところもないのかなと思う。

香川 元々標準服の学校だったのですか。

報告者(兵庫) 校則改定前は上着に半ズボン、上着にスカートという標準服で、靴下は白と全部決まっていた。

兵庫 性的指向のカリキュラムはあるのか。

報告者 6年生で4つの性(体・心・指向・表現)の組み合わせは色々だと教えている。

奈良 子どもは多様性に出会いながら揺れているしんどさがあるのではないかということ。「そんな時代じゃない」という子ども言葉から学ばせてもらった。制服を着用しなければならぬ決まりもなくなったということで保護者への取組と反応は。

報告者 授業の様子を通信で発信。オープンスクールや授業参観で啓発。校則改正に向けても一定の理解があったと思う。

だ人権課題について気になることがあれば家で話してくださいという働きかけをした。夏休に親子でつくる人権標語を課題にしている。そこで親子でも考え方が違うことを改めて感じた。3つ目の自分を見つめ直す瞬間は日頃の授業の中でもある。自分に偏見があることに気づく子どももいた。(その後、人権カルタについての紹介。)

京都 ほとんどの生徒が人権を大事と語っていることが、すばらしい。親子人権学習について、家庭で話しやすいように何か工夫されたことや、当日の保護者の参加人数と参加できない生徒の様子について。

報告者 話しやすい工夫については、声かけを行っていった。かなりたくさん保護者が参加した。保護者が来られない生徒には、先生がついて共に語りあった。家庭で話ができない家もあるがカルタ取りを通じて親子で話し合いができたと思う。家で話をする雰囲気は少しずつ見られるようになった。

新潟 私が昨年度まで勤務していた学校は、部落の子がたった一人で、その子は部落の中に住んでいないというような状況にある。そんな中、関わってきた出身の子が学校で部落問題について話してくれた。識字学級に交流に行ったりすることから全部で24人の中には部落の子がいるのかと思う。部落の親や祖父母から聞いてきた話を交流する場面があるのか。私は県内に唯一隣保館がある地域だったので、教科学習をしながら祖母から聞いた話をお互い交流した。地域と繋がる実践はあるのか。

報告者 校区に部落はない。親戚の子が親からの結婚差別を受けた不幸な状況があったことを記憶している。差別する側もしっかり学ばなければ不幸になるという思いがあり地区のない地域だからこそ、学んでいかなければならない。

奈良 識字学級について、夜間中学校ってことか。考え方がかわったら、自分事としていけるのか。

徳島 識字学級は部落差別で文字を奪われたものが通う学習の場。地域のみんなと行政で協力して文字をとりかえす場。部落差別の現実から学ぶ場にもなっている。

報告者(徳島) 生徒の意識の変容。考え方が変わったら、自分事としてとらえていると考えていくことは大切だと思う。

兵庫 加茂谷中学校も再編成される流れの中で、この活動で継承していきたいものや今後の思いを継承したいことは。

徳島 国際識字年に識字の啓発ビデオを作成した時に、このビデオが全国の啓発に役立つという考え方と子どもが撮影されると出身がわかりマイナスに働かないかという賛否があり、結局、子どもは出演できなかった。今後、学校が合併するにあたり、部落のある学校とない学校が一緒になる。先生方にまず識字について知ってもらいたい。加茂谷が一番学習してきている。識字学級について知らない先生や生徒には来てもらいたい。加茂谷中学校は残して欲しい素晴らしい学校である。

徳島 加茂谷はつながりが強い地域で、震災した東北への支援やアフガニスタンにランドセルを送る運動をやっている。「環境人権宣言」というものでも繋がっているの、統合してもつないで欲しい。

Ⅲ 総括討論(第二日)

徳島 かつて加茂谷中と統合する隣の中学校の教員として同和教育を実践していた。統合しても仲間づくりを通じて加茂谷中学校も学んでいくべきだと思う。SNSでアウティングされた。ムラとして、どう発信するのか。様々な取り組みがあるが、年1回人権フェスティバルを行っている。さまざまな学びが必要。例えば、部落に集まって交流し、自分の目で学んで欲しい。被差別の立場でない人たちも今一緒に学んでいる。交流、仲間づくりが大事である。

徳島 子どもたちには、障害者問題について講演をしている。障がい者問題にはマイナスのイメージ持つ傾向がある。講演の組み立てでは子ども笑わせたり、カラオケで歌ったりしている。悩み事を抱えている子どもたちに少しでも笑顔でいて欲しい。25年間全県をまたにかけて講演活動をしている。2時間の講演を聞いただけで子どもたちの様子が変わるということ、後から先生方から聞いている。

長崎 カネミの報告について、カネミ油症という言葉聞いたこともない状況で五島に行った。当時、この問題は、あまり公に語られてこなかった。保護者の話を聞いてショックを受けた、その後、フィールドワークなどしながら理解を深めていった。どうにかして子どもに伝えないといけないという思いがある。五島に住む子どもたちは、いずれどこかでカネミ症について出会う。だから学習が必要。また、五島だけではなく、広く長崎県内でも学習していかなくてはならない。

兵庫 兵庫の報告で命を奪うという言葉があり、私も実感している。中学生対象のLGBTQ+の授業実践を行っている。その出発点はトランスジェンダーのAさんとの出会いでした。人権教育として進めていかなければならないソフト面がある。当事者の子が声を上げないでも、行政や中学校側は制度として

準備をしていく必要がある。

神奈川 報告者にとっての部落についての話は、心に残った。神奈川の識字学級で同和教育に出会った。最初は、その地域に怖さを感じていた。学校教育を受けた人間は文字を奪った側といわれ、その時は理解できなかった。だが、関わる中でだんだんとわかってきた。報告者のかかわる中で父について気が付いた。ここの場がかわるきっかけになって欲しい。

兵庫 同和教育をうけてこなかったのも、色々なことを刷り込まれてきた。なので、あまり考えていなかった。40年前、学校統合によって同和推進校といっしょになることになり、「同和学习ばかりされたらこまる」と署名運動をしたことがあった。その時は差別意識があると思っていなかった。そのとき、「部落のものは部落の学校で勉強せい」という部落差別発言がおこった。家庭ではそのようなことが普通に話されていたことを感じた。もっと勉強せんといかんと思ひ学習会に参加するようになった。人との出会いによって、いろいろと変わることができた。自分のことを語ることが大事。自分の中にある差別性に気づき、ぜひ生徒たちに話してほしい。

報告者 部落にかかわることで自分を見つめなおすことができた。差別は見ようとしないとみることができないという言葉があるが、「お父さんなりの戦い方をしている」という意見を聞いて、まさしくそうであると感じた。言葉だけでなく、その姿、背景をみていくことが大事であるということに気が付くことができた。これからはお父さんのことをしっかりみていきたい。

大阪 低学年からスマホを使っていて、簡単に情報が入ってしまう。特にショート動画が気になっている。人権の意識というフィルターがあれば無視できたりできるが、それが無い子どもたちは感化されるのではないかと。その積み重ねが、日頃の言葉遣いや人権意識を捻じ曲げてしまうと考える。そのためにも人権の確立をめざすことは無視できない。

奈良 部落を含む学校で、6年生の部落史の授業で解放令反対一揆について子どもたちと考える機会があった。目標として自分たちの仲間関係を見直すことに置いた。しんどい人に寄り添える仲間づくりが大切。部落のない学校でも部落問題学習をしていかなければならない。

愛媛 正しく知ることが大事であると改めて感じた。これからも学び続ける必要があると感じた。授業づくりをするうえでの宿題としていきたい。

山口 屠場を扱った教材や食肉センターの人の思い

を聞く中、イメージの部分は必要なのか。差別をなくすプロセスで自分の差別意識を語ることは、当事者として痛みはあるが、受け取ると思う。ただのイメージで語るだけでいいのか。子どもたちが学びの中で、気づいていくのではないかと。部落、在日など色々なワードを当てはめた時、あの授業の導入はよかったのか、そして自らの差別と向き合う学習と何が違い、どんな配慮は必要なのか一緒に宿題として持ち帰りたい。

神奈川 差別と偏見をなくすには、しっかりと差別を受けてきた相手の思いを知ることが大事であるという言葉が心に残った。前日に電話で部落出身の方が「全同教の日が自分にとって1年の大晦日で、次の日が1年の始まりと思いながら全同教に行っていた。そして、ご自身の生活の中でどのように実践していくか考えると言っていた。皆さんのお話を聞いて、自分自身が部落問題、部落問題学習としっかり向き合い、生徒と一緒に学んでいきたいと思った。

○ 報告者より

報告者(奈良) この場で「同和教育は嫌いだ」という思い言ったが、今回参加させてもらって、手の震えはなくなった。参加してよかった。本音をしっかりと聞くことが大事で、傷ついている子どもに寄り添っていきたい。自分事として考えていくことは大事。今日の学びは明日に生かしていきたい。

報告者(奈良) 自分の中に差別意識はなかったのかを、考える2日間であった。自分の弱さや差別心があること、自分の気が付かないことがたくさんあることに気が付くことができた。これからは自分から伝えていかなければならないとおもった2日間でした。

報告者(長崎) 地域の人権課題の取り組みを発表して多くの質問や意見をもらい、3つのことを確認できた。差別の構造は、一緒だった。正しく知ること。まわりが変わっていくことが大事であることがわかった。学校の授業だけでなく地域や保護者に広げて行くための取り組みを模索していきたい。カネミの被害者の言葉で「私のような苦しみを子どもたちには味わわせたくない。でも、人は食べ物、飲み物を体に入れて生きていく以上、どこにでも誰でも私と同じような被害に遭う可能性がある。食の安心安全を提起するためにも、この事件を子どもたちに伝えてほしい」と。この言葉は、長崎だけではなく、全国に通じる問題かなと思う。

報告者(新潟) Aの父親の見方が変わった今の自分として父親と話がしたいと気持ちでいる。自分の関わりについて、たくさんご意見をいただいて、心強かった。これからも、この情熱を学校に持ち帰り

広げていきたい。これからもAさんやAさんの家族に関わりながら成長していきたい。

報告者(兵庫) 性自認についてのカリキュラムは学校に戻って作っていく。ジェンダー、性の多様性についての報告をしましたが、命に関わるとても大切な問題で早急に対応しなければならないテーマであることを実感した。正しく知る、交流することが大切だということや、仲間づくりということは、どの問題にも共通するものであることを再認識した。

報告者(徳島) つながりのありがたさを感じた。人と人がつながることの大切さを感じた。人権学習で子どもが変わるっていう話も改めて実感できた。今回、色々な話を聞くことで自分自身を見つめなおしてこれからも人権教育を進めていきたい。

協力者 2日間、5本の報告がありました。様々な意欲的な取り組み、カネミ油症事件の学習の始まりの一步となる指導案をつくって来られたり、部落がない学校だからこそ、部落問題に取り組むんだという姿勢で進められている実践であったり、性的マイノリティ、そしてジェンダーについての考え方を深めて、学校の体制まで変えていった取り組み。そして被差別部落の方々そして公害被害者の方々に学んで来られた報告者の方々に最大の敬意を払いたいと思います。私自身もできることを取り組んで行きたいと思います。私は京都市の中学校ですが、明後日に人権学習を予定しております。今回、中学二年生のクラスで、外国人差別に関する学習を行います。部落出身の方、外国にルーツのある方、外国人の方、障害のある方、性的マイノリティの方、公害病に苦しむような方だけが頑張ればいいということではないという話を多くの方々からいただきました。その視点が本当に大切だと思います。私も学校で繰り返し、色々な先生方に伝えていることは、差別はする側の問題であり、する側が変わらないと、この社会は変わらない。このような視点を大事にしていればと思っています。先ほどフロアーからお話がありましたが、私自身も今日が大晦日だと考えていました。また明日1月1日なので、また新たな気持ちで頑張っていこうと考えました。皆様と同じ気持ちでいたいと思います。